

甲府盆地から見たヤマト（1）

—甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品—

小林 健二

- 1 はじめに
- 2 甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品
- 3 編年の位置づけについて

- 4 石材・製作技法と製作地
- 5 今後に向けて
- 6 おわりに

1 はじめに

山梨県立考古博物では、2006（平成18）年10月7日から11月26日まで、第24回特別展「甲府盆地から見たヤマト—甲斐銚子塚古墳出現の背景—」（以下、特別展）を開催した^①。筆者は、この展示会の担当として準備に関わることとなつたが、企画した背景には以下のようない経緯がある。

古墳時代前期では東日本最大級の規模を持つ国指定史跡甲斐銚子塚古墳は、4世紀後半に築造された全長169mの前方後円墳である。1928（昭和3）年に偶然の機会から石室が発見され、出土した三角縁神獣鏡をはじめとする副葬品及び石室構造から、畿内との強い結びつきが指摘されている古墳である。最近では、平成16年度の第2次整備事業に伴う発掘調査において、後円部北側に「突出部」の存在が、周溝内に「区画堤」とも考えられる遺構が確認された。後円部西側の墳端では木柱が、周溝内からは第1次整備事業に伴う発掘調査において出土していた円盤形・蕨手形の木製品が複数個体発見されるなど、儀礼に関わる木製品も多数出土した。笠形木製品の祖型とも考えられるものも含まれ、これら墳丘・周溝の構造、出土品から、甲斐銚子塚古墳が極めて畿内的な古墳であることが再確認されるに至り^②、再び注目されることとなつた。

また、第1次整備事業が行われてちょうど20年目でもあり、この間古墳時代の研究は大きく進み、特別展は改めて甲斐銚子塚古墳を紹介する絶好の機会となつた。

以上の成果をもとに、特別展では、甲斐銚子塚古墳をはじめ中部・東海・畿内各地域の出土品を通して、甲斐銚子塚古墳出現の背景について再考するとともに、ヤマト政権との関わり及び東日本での位置づけ、さらに「甲斐（甲府盆地）」という東国の一地域から見たヤマト政権について展示を行つた。

関係機関の協力により、展示資料については充実した内容となつた。山梨関係では、甲斐銚子塚古墳とともに、1929（昭和4）年に発見され、現在東京国立博物館に所蔵されている大丸山古墳の副葬品のほとんどが「里帰り」し

展示され、約2ヶ月の間、間近で見ることができた。そして何よりも、甲斐銚子塚古墳については、旧来より知られていた出土品と最新の出土品を同時に展示できたことは、大いに意義のあることであった。

一方では、当初のテーマ通りの内容で一貫した展示ができたかどうかは別にして、課題が多く残されたことも事実である。

その一つに腕輪形石製品があげられる。鏡とともに前期古墳の代表的な副葬品であり、工芸品としても優れた造形美から副葬品の「傑作」ともいわれており^③、今回筆者も改めて興味を注がれた。

研究史的には、明治期以来鍬形石を中心に詳細な編年的研究が進められ、成果が蓄積されてきた^④。そして、畿内を中心各地に分布する状況から、当然のことながら古墳時代前期の政治動向と密接に関わるものとして扱われてきた^⑤。

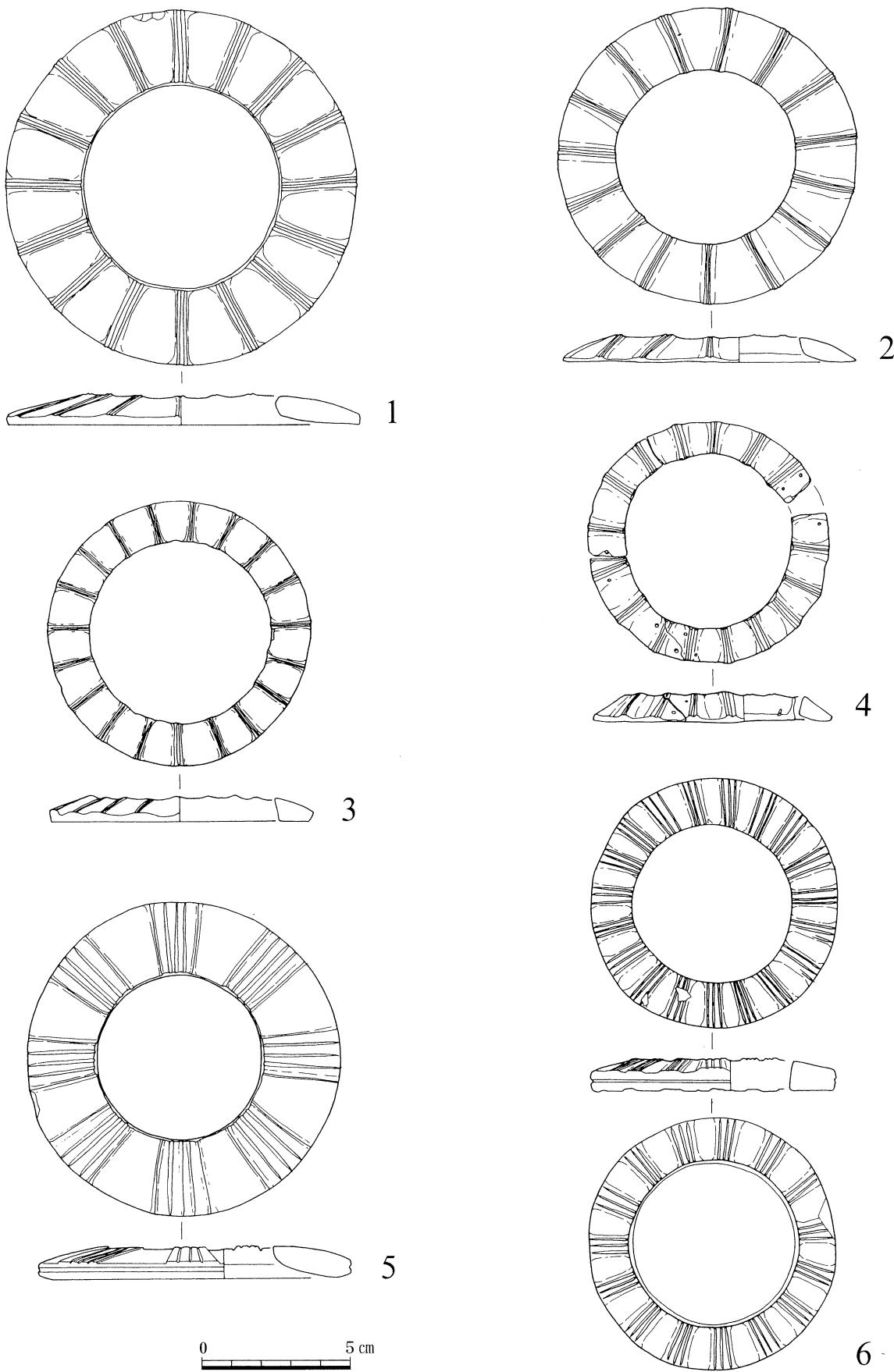
このような状況を踏まえ、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品についても、近年の動向に基づいた、現時点における位置づけが必要と思われる。

小稿では、特別展を通じて得られた成果・課題の中で、甲斐銚子塚古墳から出土した副葬品のうち、まず腕輪形石製品を取り上げてみたい。

2 甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品

東京国立博物館所蔵の甲斐銚子塚古墳出土の副葬品については、発見後すぐに出土の状況及び個々の副葬品について報告・考察され、1930（昭和5）年の国史跡指定とともに学界で広く知られるようになった^⑥。その後、1975（昭和50）年に刊行された『中道町史』上巻に、実測図と写真が掲載された^⑦。さらに1996（平成8）年には、山梨県史編纂事業に伴い、改めて出土品の調査と実測が行われ、1999（平成11）年に刊行された『山梨県史』資料編2において実測図が掲載された^⑧。しかし、どちらも副葬品個々についての観察の記述はほとんどない。

これらのうち、腕輪形石製品には車輪石6点と石釧5点



第1図 甲斐銚子塚古墳出土車輪石 (1:2 『山梨県史』より)

がある。鍬形石の出土は知られていない。ここでは、『山梨県史』掲載の実測図及び特別展における展示室での観察に基づき見ていくこととする。

なお、各部の名称、型式分類については、上記の研究成果を参考にしながら進める。

(1) 車輪石 (第1図)

車輪石はすべて外形・内形ともほぼ正円形である。1点を除き環体幅は小さい。出土時の状況は、石室の中央、木棺内に置かれていたとされる。文献からもわかるとおり、表裏面には多量の赤色顔料が付着しているが、いずれも所々に濃い緑色の光沢が見え、研磨されているのが確認できる。石材は碧玉と思われる。

1は、外径12.1cm、内径6.6～6.9cm、高さ1cmで、外端部がわずかに欠損している。断面は内孔部で厚さ6mm、外端部で4mmを測る。底面は、外端部から環体の中ほどまで平底であるが、内孔に向かって4mmほどの傾斜をもつ。環体幅は2.5～2.6cm。斜面の放射状彫刻は、平面と沈線をもつ凸帯を組み合わせたものである。凸帯との境の屈曲が緩やかなため、実測図からは匙面のように見える。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のIa型式斜面彫刻4・断面形Dに比定される。

2は、外径10cm、内径6～6.1cm、高さ9mmで、断面は内孔部で厚さ7mm、外端部で1.5mmを測る。底面は、1と同様外端部から環体の中ほどまで平底であるが、内孔に向かって3mmほどの傾斜をもつ。環体幅は1.9～2.1cm。1同様斜面の放射状彫刻は、平面と沈線をもつ凸帯の組み合わせで、鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のIa型式斜面彫刻4・断面形Dに比定される。

3は、外径9cm、内径6.1cm、高さ8mmで、断面は内孔部で厚さ8mm、外端部で4mmを測る。底面は平底で、環体幅は1.3～1.4cm。斜面の放射状彫刻は、平面に沈線をもつ凸帯の組み合わせであるが、1・2に比べ平面の部分は匙面に近い。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のIa型式斜面彫刻4・断面形Fに比定される。

4は、一部が欠損し、さらに4点に割れており、9箇所に補修孔がある。推定の外径は8.2cm、内径は5.8cm、高さ1cmで、断面は内孔部で厚さ6mmほど、外端部で2mmを測る。底面は内孔側でわずかに上がり底となっている。環体も欠損により幅は1.1～1.4cmとなっている。6点の中では斜面の傾斜がきつく、放射状彫刻は平面に3同様匙面に近い平面に沈線をもつ凸帯を組み合わせている。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のIa型式斜面彫刻4・断面形Eに比定される。

5は、外径10.7cm、内径4.6cm、高さ1.1cmで、外端部がわずかに欠損している。断面の厚さは、内孔部で6mm、外端部で5mmを測る。底面は、内孔に向かって5mmほどの傾斜をもつ上がり底で、環体幅は2.5～2.6cm。斜面の放射状彫刻は、平面と凸帯を組み合わせたものであるが、凸帯部は3条の沈線をもつ幅広のものを8箇所配置したもの

で、さらに外端部側面にも沈線が施されており、他に類例のない、極めて特徴的な彫刻をもつ製品である。したがって、平面の形態は鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のIb型式に比定されるが、斜面彫刻・断面形は比定できない。

6は、外径8.5cm、内径5.4cm、高さ1.1cmで、表面（上面）と外端部がわずかに欠損している。断面の厚さは、内孔部で1cm、端部で7mmを測り、形状は長方形に近い。底面は平坦で、環体幅は1.2～1.4cm。斜面の放射状彫刻は両面あり、組み合わせは5と同じ平面と3条（一部2条）の沈線をもつ幅広凸帯であるが、こちらは凸帯部が表面に19箇所、裏面に15箇所と密である。やはり外端部側面にも沈線が施されている。平面形態は鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のIa型式に比定される。

(2) 石鉤 (第2図)

石鉤については、5点のうち1点は約3分の2が欠損している。車輪石同様、多量の赤色顔料が付着しているが、濃緑色と光沢が確認できる。石材も同じく碧玉と思われる。

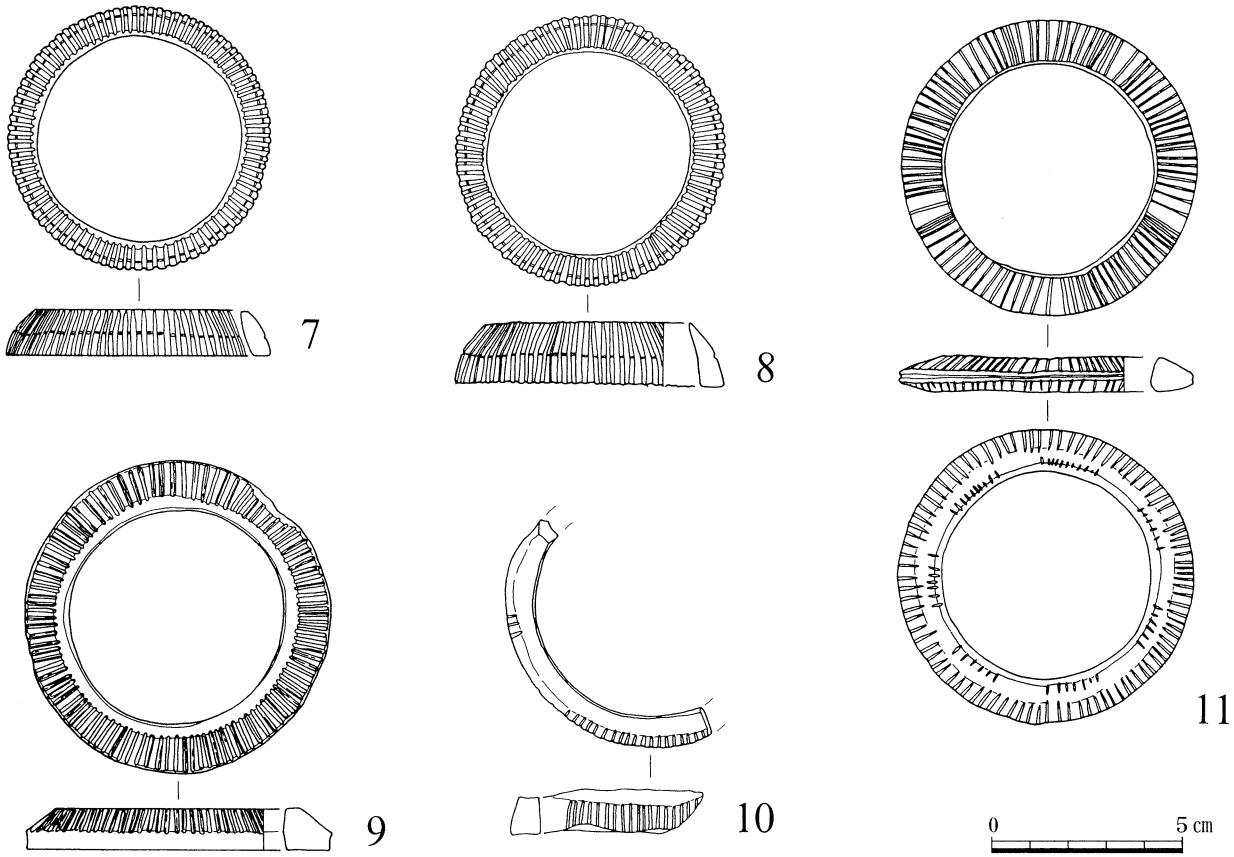
7は、外径7cm、内径5.6cm、環体高1.2cmを測り、外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施されている。さらに境には沈線を一条巡らせている。断面形は外斜面の傾斜がきつく、内面が内傾している。鐘方分類のAⅠ-a型式、蒲原分類のIa類に比定され、石鉤の中では多く見られる型式である。

8は、外径7.2cm、内径5.6cm、環体高1.7cmを測る。7と同じく外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施され、境には沈線を一条巡らす。鐘方分類のAⅠ-a型式、蒲原分類のIa類に比定され、断面形は外斜面の傾斜がややきつく、内面は内彎しながら内傾している。

9は、外径8cm、内径5.7cm、環体高1.1cmを測る。外端部の一部が欠損している。底面（環体幅）とほぼ同じことから斜面の傾斜は比較的んだらかで、細刻線はさらに細かい。側面には1段の匙面をもつ。断面形については、内面は稜線が巡るもののはば直立し、上端部に平坦な面をもつ。鐘方分類のAⅡ型式、蒲原分類のⅡa類に比定され、7・8とともに多い型式のものである。

10は、上面・下面とも欠損・剥離しているが、側面に施された細刻線から、本来の形状は7・8と同様のものと見られる。推定の外径は6.8cm、内径は5.8cmとなる。現存の高さは1.3cm。

11は、外径7.8cm、内径5.5cm、高さ9mm～1cmを測る。上下面に斜面を有し、上面には7～10とは異なる細い沈線が施されており、あまり明瞭ではないが平坦面の幅のやや広い部分2条が5箇所に配置されている。下面には研磨したような平坦面を挟んで、外径部に沈線を、別工程で内径部に6～11本単位で7箇所の沈線を施し、側面にも沈線が巡る。鐘方分類のAⅣ型式、蒲原分類のVa類に比定される。



第2図 甲斐銚子塚古墳出土石釧（1:2 『山梨県史』より）

3 編年の位置づけについて

甲斐銚子塚古墳出土の車輪石と石釧について見てきたが、ここで形態的特徴をもう一度整理してみよう。

まず車輪石については、平面形はすべて正円である。環体幅は小さいものが多く、斜面彫刻は折面や匙面ではなく、平面中心の構成のものであり、両面装飾のものも含まれている。断面形は上がり底から平底への過渡的な様相が窺える。また、他には見られない型式（第1図5・6）もあるが、これについては後述する。

次に石釧については、内面が内傾しているもの（第2図7・8）と直立しているもの（同9・10）がある。両面装飾のもの（同11）もある。

以上のような特徴から、先学の研究成果を参考にすれば、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品は、おおむね前期の新しい段階のものであることは明らかである。

しかし一方で、車輪石・石釧ともに非常にバリエーションが豊富という特徴が存在し、鍔形石のように祖型貝輪からの変遷が辿りにくく、北條芳隆氏も指摘するように⁽⁹⁾、両者の型式変遷はわかりにくいのが現状でもある。

ところで、特別展で展示した滋賀県雪野山古墳と愛知県東之宮古墳の出土品については、赤塚次郎氏により濃尾平野の土器編年を基軸とした編年案が提示されている⁽¹⁰⁾。

これによると、雪野山古墳は廻間II式末に、東之宮古墳は廻間III式中頃に位置づけられている。

濃尾平野と甲府盆地との併行関係についても、S字甕の変遷を中心に筆者が提示してきたものがある⁽¹¹⁾。そして、甲斐銚子塚古墳においても、最新の発掘調査において周溝からS字甕が出土しており、土器による編年位置づけがより明確になった。すなわち土器編年でいえば、甲斐銚子塚古墳は松河戸I式前半期—甲斐古墳IV期という併行関係に位置づけられる⁽¹²⁾。筆者の年代観では4世紀後半となり、玉類など他の副葬品を考慮しても、従来の古墳の年代と相対的には矛盾するものではない。

4 石材・製作技法と製作地

それではここでさらに、特徴的な車輪石（第1図5・6）の存在について見てみると、斜面彫刻に平面をベースに凸帯と沈線を多用したこの車輪石は、極めて高い技術を窺わせる作品であり、類例を探すのは難しい。特に5については、既に「地元産」ではないかとの指摘がある⁽¹³⁾。これは、北陸または他地域から石材が運ばれ、甲府盆地で製作された「在地での生産」という意味であろうが、筆者も他の車輪石から型式的に変化したというより、独自のデザインのもと他の5点とともに甲府盆地で製作されたものと考えたい。それがどのような体制のもとに生産されたのかを明らかにするのは容易なことではないが、各地で未製品が出土していることも報告されており、製作技法が各地へ伝播している可能性は高いと思われる。

石製品の材質と製作技法に関しては、岡寺良氏による重要な視点がある⁽¹⁴⁾。甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石背品の材質は、濃緑色で硬質の碧玉である可能性は高く、石釧の内面はすべて直立している訳ではないが、外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施されているもの（第2図7・8）がある。そして、三角縁神獣鏡との強い共伴関係にあるということから、これら石製品は岡寺氏のいう「A系統」に属することになる。それが、軟質の緑色凝灰岩製の細かい細刻線が施された石釧をもつような「B系統」との製作工人集団の差が捉えられるすれば、さらにはその背後にヤマト政権による積極的な施策⁽¹⁵⁾があったとしても、倭鏡も含めた畿内以外の地での積極的な、活発な製作が行われていたことが考えられる⁽¹⁶⁾。

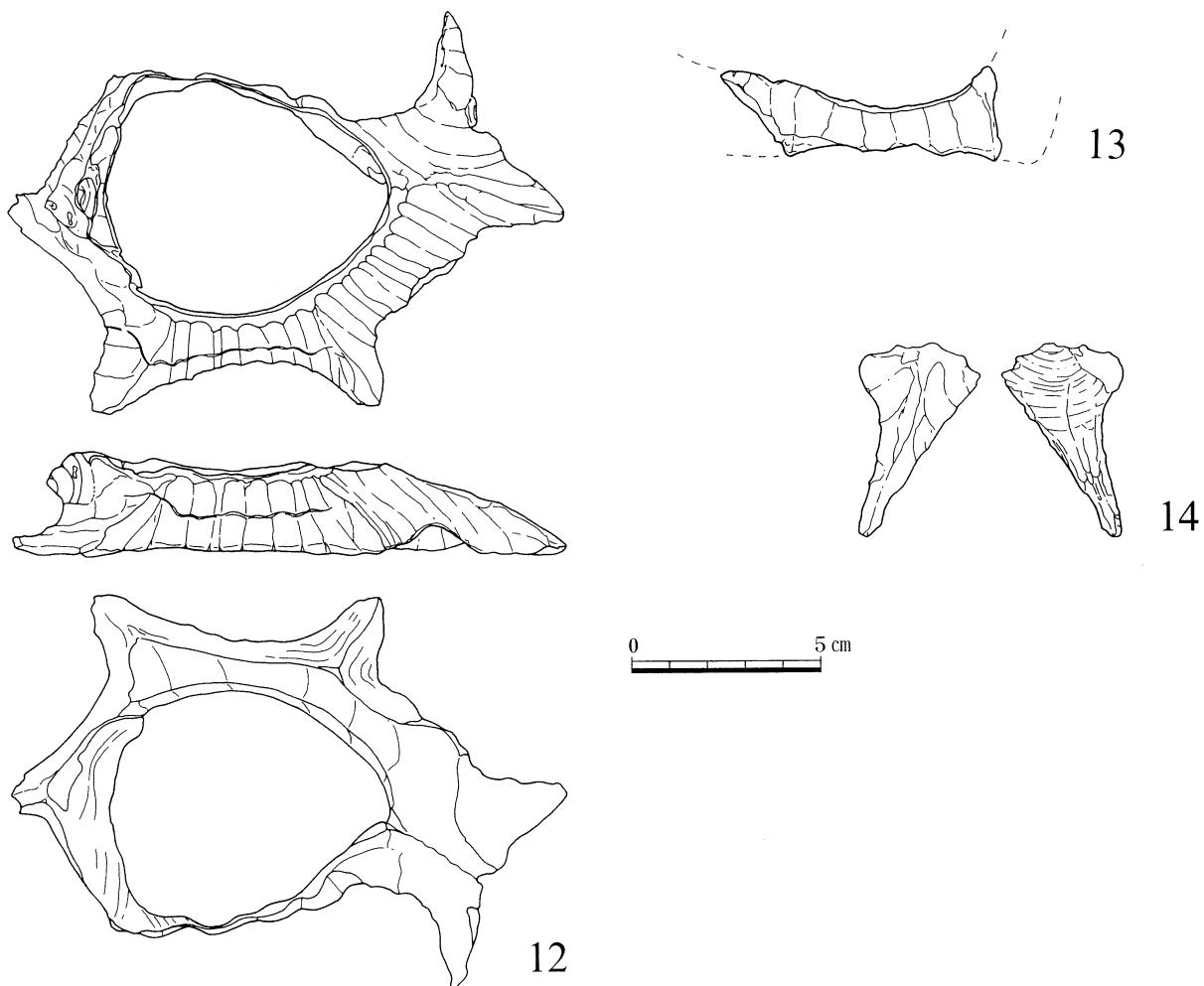
5 今後に向けて

はじめにも述べたが、特別展を開催するきっかけとなつた、甲斐銚子塚古墳の第2次整備に伴う調査において、突出部や周溝の構造、多くの木製品の使用が確認されたことにより、この古墳が前期後半の東日本において、完成された極めて畿内的な古墳であることを改めて示した。

しかし、日常使用する土器をはじめ、古墳時代前期の生

活スタイルは濃尾平野に淵源をもつ東海系によって基盤が造られ、中でもS字甕を早くから選択的に取り入れた甲斐（甲府盆地）は東日本では特異な地域であることは、これまで述べてきたところである。甲斐の古墳時代のはじまりは、このS字甕の波及と定着が大きな画期であり、この基盤の上に、まず前方後方墳の小平沢古墳が造られ、その後天神山古墳・大丸山古墳と前方後円墳が続く。この間に起る駿河・諏訪を巻き込むS字甕の拡がりは、甲府盆地が駿河・伊豆・信濃・相模を結ぶ流通ネットワークの要衝⁽¹⁷⁾として、前期後半にピークを迎える⁽¹⁸⁾。このような背景のもとに、腕輪形石製品の石材・製作技法が伝播する一方、スイジガイ製の貝釧（第3図12～14）のようなものを手に入れるルートも存在したのである。そして、墳丘の型式・構造において、畿内の古墳に忠実な築造技術で造られた甲斐銚子塚古墳が出現する。

甲斐銚子塚古墳の東日本での位置づけについては、従来から畿内政権の東国経営の前線基地的な役割が考えられきた。甲府盆地内にはヤマトタケルの伝承が多く残されているが、それは『古事記』や『日本書紀』に描かれているように、ヤマトタケルに代表されるヤマトの將軍たちによる東征の結果と重なり、前方後円墳や三角縁神獣鏡などの考



第3図 甲斐銚子塚古墳出土貝釧（1:2 『山梨県史』より）

古学の成果も、こうした歴史観を裏付けるものとして解釈されてきた⁽¹⁹⁾。しかし、前方後方墳の系譜や副葬品個々について研究が進んだ結果、ヤマトからの一方通行であった古墳文化の伝播についての考え方は、近年大きく見直されできている。

甲斐銚子塚古墳から出土した木製品は、前期古墳では類例がほとんどなく、筆者が「円板形木製品」と呼ぶものが笠形木製品の祖型になるとすれば、最古のものとなる。それが甲府盆地で生まれ、ヤマトへ波及したものかというと、三角縁神獣鏡などの分布状況からも難しいが、地方からヤマトへ向けて発信するものがあったことも考えてみる必要があることを、特別展においても最後に述べたところである。

腕輪形石製品についてもまた、同様のことがいえるのではないだろうか。

6 おわりに

甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品について、近年の動向を踏まえ取り上げてみた。決め手となる石材について、十分な検証ができていないまま筆をとったことに批判を受けるかもしれないが、今後も引き続き、「甲府盆地から見たヤマト」について考えていきたいと思う。

註

- (1) 山梨県立考古博物館 2006 『甲府盆地から見たヤマト—甲斐銚子塚古墳出現の背景—』
- (2) 森原明廣・森屋文子 2005 『銚子塚古墳附丸山塚古墳』 山梨県教育委員会
- (3) 白石太一郎 2000 『古墳の語る古代史』 岩波現代文庫
- (4) 小林行雄 1954 「鍬形石の研究」『日本考古学協会彙報』別篇 2
三木文雄・小林行雄 1959 「伝統工芸と新興工芸」『世界考古学大系』3 日本Ⅲ 平凡社
- 杉山晋作・八重樫純樹 1986 「電算機による石鍬・車輪石の類例検索法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第11集
- 蒲原宏行 1987 「石鍬研究序説」『比較考古学試論』 雄山閣出版
- 鐘方正樹 1988 「碧玉製腕飾類の研究視点」『網干善教先生華甲記念考古學論集』
- 蒲原宏行 1991 「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』第8巻 古墳II 副葬品 雄山閣出版
- 北條芳隆 1994 「鍬形石の型式学的研究」『考古学雑誌』79巻第4号 など
- (5) 小林行雄 1956 「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』 この中で、仿製三角縁神獣鏡の配布と関わり、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品が取り上げられている。
- 川西宏幸 1981 「前期畿内政権論—古墳時代政治史研究—」『史林』64巻第5号 など
- (6) 上田三平 1928 「銚子塚を通して觀たる上代文化の一考察」『史学雑誌』第39編第9号
- (7) 中道町史編纂委員会 1975 『中道町史』上巻
- (8) 山梨県 1999 『山梨県史』 資料編2 原始・古代2
- (9) 北條芳隆 2002 「古墳時代前期の石製品」『考古資料大観』第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品 小学館
- (10) 赤塚次郎 2005 「東之宮古墳の編年的位置とその特徴」『史跡東之宮古墳調査報告書』犬山市教育委員会
- (11) 小林健二 1998 「甲斐における古式土師器の成立—3・4世紀の土器編年と墳墓—」『専修考古学』第7号
- (12) 赤塚次郎 2006 「甲斐銚子塚古墳と東海系文化」山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
- (13) 川西宏幸 2004 「記念講演 長柄・桜山の時代」『シンポジウム 前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～／国史跡指定記念講演会 未来に活かす史跡整備を考える 記録集』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- (14) 岡寺良 1999 「石製品研究の新視点—材質・製作技法に着目した視点—」『考古学ジャーナル』No.453 ニューサイエンス社
- (15) 河村好光 1986 「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』第3巻 岩波書店
北條芳隆 1990 「腕輪形石製品の成立」『待兼山論叢』24号 史学篇
- (16) 小林健二 2007 「甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品について」『専修考古学』第12号
- (17) 白石太一郎 2006 「甲斐銚子塚古墳とヤマト政権」山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
- (18) 小林健二 2007 「大陸中央—甲斐地域を中心にして」『考古学ジャーナル』No.554 ニューサイエンス社
- (19) 白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権』文春新書